

NPO 純正律音楽研究会会報 ～2017年8月発行～

# ひびきジャーナル



〒168-0072 東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 Tel:03-5317-0291  
Fax:03-5317-0289 e-mail:puremusic0804@yahoo.co.jp

発行日 平成29年8月21日  
発行責任者 NPO 法人 純正律音楽研究会  
編集 相坂政夫

## No.53



残暑が続いておりますが、会員の皆様如何お過ごしでしょうか。  
先日の会報でお知らせいたしました、「癒しの音楽コンサート」が来月の9月16日土曜日、午後4時開演、と迫ってまいりました。まだお席は少々ございますので、お早めのご予約をお願いします。

また、来年は1月27日「New year concert」地下鉄丸ノ内線、「茗荷谷駅」から徒歩5分の「ラリール」にて開催いたします。今回は小さなホールになりますので、昼の部、13時30分開場 14時開演、夜の部、17時30分開場 18時開演と2回公演になります。

入場料は昼夜とも3,500円、会員特別価格3,000円、各部50名様限定となりますので、ご予約頂ければ幸いです。

当会も今年3月で第14期の決算が終わり、15期目に入りました。今期も純正律音楽の普及に邁進していきたいと思っております。

今後とも純正律音楽研究会をよろしく願い申し上げます。

## 真夏の嬉しい様々な出会い

洗足音楽大学教授・ヴァイオリニスト  
NPO 法人 純正律音楽研究会 代表  
水野佐知香

会員の皆さま、今年の夏は本当に熱いですね。毎日温泉に浸かっているようです（笑）

さて、私は今、大阪に来ています。

今年の2月から1年かけて計4回、ベートーヴェンのピアノとヴァイオリンのソナタ全曲の演奏会を東京と大阪で行なっています。その3回目の大阪公演を明日に控えてのリハーサルです。東京の3回目は9月27日になります。おかげさまでベートーヴェンを通して人生、人との関わり、自然など感じて音楽と向き合っています。玉木さんは、どういうわけか作曲家ベートーヴェン先生をあまり好きではなかったようです。本当は認めていたのかも!?

と、玉木さんの残したベートーヴェンのヴァイオリンソナタの楽譜を見て思うこの頃です。

今年もうれしい様々な出会いがありました。一柳慧先生が推薦され、神奈川県民ホールが招聘したアメリカから「ユリシーズ」という平均年齢28歳という若いクアルテットを私の勤めている洗足学園で、学生たちとコラボレーションを、そして演奏をしてもらいました。彼らの学生へのアプローチと演奏の素晴らしかったこと!! 若いエネルギーと新しい解釈もあり、私もとても勉強になりました。日本でも若手が頑張っていますが、世界でもたくさん新人類が誕生していますね!

この7月は特に忙しい月でした。毎年教えている授業でのストリングオーケストラのゲストに世界から注目されているリスト室内管弦楽団の若きリーダー、音楽監督のトゥフィリスト・ペーテル氏を招聘、生徒たちと共演、マスタークラスが行われました。

総勢45人の編成のストリングオーケストラで、ヴィヴァルディの四季、こんな大きな編成で弾いたことがもちろんないとのことでしたが、お見事! 生徒たちも刺激をいただき素晴らしい演奏になり、感動でした。

7月末には、私の出身地、刈谷市で行われたアマチュアオーケストラの全国大会のコンサートミストレスとして、パリのアメリカ人、グランドキャニオンを演奏、音楽を通していろいろな分野の方々との広がりがありました。難しい曲でしたし、2日間のリハーサルで本番というのはとてもきついものもありましたが、一致団結とはこのこと! 素晴らしい一体感で本番はノリノリで感動の演奏となりました。

皆さんからの感動のメールをいただいたり、FBで繋がったりこれまた、うれしい出会いでした。

秋には、毎年ヴィルトゥオーゾ横浜の定期演奏会、当協会の千葉県市川市の公演、滋賀県でのコンサート、またまた三人官女などの本番も続きます。

還暦を過ぎて、1つずつ若返っていくつもりになっていますが、不思議なもので、いろいろな方の出会いはもちろんですが、昔の友人知人など偶然の出会いも多くワクワクしているこの頃です。

さあ、次はどんな出会いが…！

暑い夏、お身体を大切に過ごされますように。

### ムッシュ黒木の純正律講座 第52時限目

#### 平均律普及の思想的背景について(41)

純正律音楽研究会理事 黒木朋興

西洋の芸術の価値は<神>との関係で決まる、という話を前回した。そして、その<神>への探求という芸術の意味をわからない日本人には、芸術を理解することはできないのかもしれない、という可能性を示唆した。

では、<神>から解放されたとされるモダン芸術はどうであろうか？19世紀末からのモダン芸術とは<神>ではなく、人間のうちにひそむ真理を探りそれを讃えることを使命としている。ということは、名目的にはキリスト教徒あるいはキリスト教圏出身でなくても、人間であればモダン芸術は理解できるし享受もできるということになる。

我々は、どのような人種であっても、どのような民族の出身だったとしても、またどのような宗教を信じていたとしても、人間である以上は共通の真理を共有しており、それを核として文明を築き豊かな社会を作っていける、ということになる。つまり神から解放されたのがモダンだと言えるし、モダンとは「神中心」の社会から「人間中心」の世界への移行とも言える。

では「神中心」の社会とはどのようなものだろうか？かつてローマ皇帝ネロなどによってキリスト教徒が弾圧されていた時代、棄教しなければ殺すという脅しに対して屈せず死んでいった人々があり、彼らのことを殉教者という。なぜ彼らは信仰を捨てなかったのかと言えば、死後の世界を信じていたからである。ここにおいて重要なのが「最後の審判」の思想である。人は皆一度は死ぬのだが、「最後の審判」の時に生き返り裁きを受け、地獄に落とされるものとキリストと共に天国に行くものとに分けられるとされる。つまり、脅しに屈して生き延びたとしても神への忠誠を捨ててしまえば、やがて地獄に落とされることになる。対して、その時たとえ生命を落としたとしても、神への信仰を貫き殉教者となることによって天国への道が開けてくるのだ。今、現実に営んでいる人生よりも神への忠誠心が重要視される社会であり、まさに神中心ということになる。

一方、死後の世界を信じるのでなければ、現世で生命を落としてしまえば終わりであり、自らを徒してまで神への忠誠を誓う必要はないということになる。このように<神>のために自らを犠牲にするのではなく、実際に生きている人間同士で手を取り合って、現世における人間の幸せを追求しようというのが「人間中心」の考え方である。このようなモダンの時代は、18世紀末のフランス革命から19世紀を経て20世紀初頭にかけて成立していくのだが、かつての

芸術は<神>へ近づくための手段であったのに対し、モダン芸術は<神>なき人間社会を讃えるという役目を担うことになる。

このように考えていけば、<芸術>は<神>から解放されることによって、一定の宗教の信徒だけではなく、すべての人類に開いたものであるかのように見えるだろう。確かに、それは間違っていない。しかし、西洋文明にとってのモダン芸術は、人間中心の社会に至るために乗り越えた「<神>の時代」を前提としていることに気をつけたい。西洋モダンの芸術家、文学者や哲学者は、必要以上に「<神>からの解放」を強調するが、果たして我々はかつてそのような「<神>の時代」を持っていただろうか？これが、私が西洋のモダン文明を大学で学んでたどり着いた疑問なのであった。

CD レビュー 純正茶寮

『タキ アヤクーチヨ』

純正律音楽研究会理事 黒木朋興



『タキ アヤクーチヨ』

イルマ・オスノ

レーベル: TDA

ASIN: B0714CWYMP

JAN : 4525937001969

南米のアンデス山脈にあるアヤクーチヨ地方に伝わるフォークロアに基づく作品。この地域の伝統の正当な後継者であるイルマ・オスノさんが満を持して発表したソロアルバムである。単に音楽的だけではなく、宗教学的にも民俗学的にも文化人類学的にも大変価値がある作品だ。

アヤクーチヨ地方は一応、国の名で言えばペルーということになる。ただ、一般に日本で知られている『コンドルは飛んでいく』などのペルー音楽とは全

く別の音楽だ。歌詞もカステジャーノ語（＝スペイン語）ではなく、現地の言葉であるケチュア語なのだ。全11曲（うちオリジナルが2曲）で歌われるのはアンデスの山の中の伝統的な世界観、自然に精霊が宿るアニミズムの世界だ。発声法も現地に伝わる独特のものである。民族音楽というより、まさに土着音楽という言い方が相応しい。

実は、この作品、ペルーで録音されたものではない。日本の秩父で作成されたものなのだ。イルマさんが毎日のように一人スタジオに通い、録音した声をオーバーダビングして、それにパーカッション、チューバやウッド・ベースなどを重ね合わせて作り上げたのだ。つまり、素材はアンデスの土着音楽であるが、日本の最新鋭の録音技術を駆使して作られている。古くて新しい一級品の民族音楽＝前衛音楽がここにはある。

では、なぜこのアルバムが秩父で録音され、日本のレコード会社から出ているのか、と言え、イルマさんが秩父に住んでいるからである。なぜイルマさんが秩父に住んでいるのか、と言え、パートナーが秩父でアーティスト集団「秩父前衛派」を結成し、精力的に創作活動を行っている天才ギタリスト笹久保伸さんだからである。

このアルバムの楽曲は、一部でイルマさんご自身が爪弾く弦楽器の音は例外として、モード主体の編曲で、基本的に和音による伴奏は行われていない。まさに、純正律音楽研究会のテーマであるモード音楽の好例となっている。

かつてワールドミュージックがブームになった時、メロディだけを伝統音楽から引っ張ってきてダイアトニックの和音でアレンジをしたまがい物の民族音楽がかなり世に出たが、このアルバムはそのような擬似土着音楽とは一線を画する。

アンデスの伝統を受け継ぐイルマさんの発声法と山の精霊の世界をぜひ味わってほしい。

## 連続6回ドラマ音楽の現場 第五回 テレビドラマの場合

玉木宏樹遺作

日本映画の黄金時代はすぎさり、今は妙な一点豪華主義と、とんでもない安物とに分極化してしまった。しかしドラマ音楽は連綿と続いている。いよいよテレビドラマの話だ。

映画とテレビドラマにつける音楽は、本質的には何ら変わることはないが、音楽以外に大きく違うことがある。それは、映画とテレビにたずさわる人間のタイプの違いである。

映画人は、どこか大道商人風なアクの強い人が多いが、テレビの方はといえば、まるでクセのないエリートサラリーマン風の人が多い。おのずから欲する音楽のセンスが違うとはいえるだろう。

さて最初にも述べたが、私は去年、正反対とも言える、二つのドラマ音楽を担当した。それを詳しく述べれば、今のテレビドラマ（テレビ映画も含める）の音楽の傾向は見てくるだろう。

TBSの二時間ドラマ「ヘッドハンター」は、かなり時間をかけて丁寧に創られたものであり、音楽にも十分注意が払われた。

ストーリーはそれほど複雑なものではない。

さる証券会社のトップアナリストが、猛烈なヘッドハンター（つまり引き抜き）攻勢にさらされる。本人には全くその気はないのに、色んな工作の罠にはまり、どんどん追い詰められて行く。

一体どこの誰の陰謀なのか... 疑いだせばきりはない。同僚？上司？秘書？.... 結局工作者だったのは本人の妻だったという意外性が、プロットの柱なのだが、最初に台本を読んだかぎりでは、その意外性が少し弱いように思えた。

こういうドンデン返しものは、創る側では明らかにネタわれているわけだから、いかに客を騙すかということに細心の注意が払われる。

だからこのドラマでは主人公の回りに登場する人物は、すべて少しずつ疑わしい行動をとる。当然音楽も疑惑だらけだ。

まあ、ごく簡単に言ってはしまったが、一体疑惑だらけの音楽とはどういうものなのだろうか。

その前に、劇伴の音楽にもいろんな要素があるので、思い出せるかぎりで類別してみるとつぎのようになるだろう。

- 1、愛、悲しみ等のメロディックなもの。
- 2、情景---自然の風景とか都会の夜とか。
- 3、アクション（格闘、カーチェイス等）。
- 4、もろもろの心理描写まえもってのリハーサルなど全くなく、手書
- 5、短いもの（ブリッジ、コンマ）。

ふつう、作曲家はどんな音楽を得意としていると思われるだろうか。

作曲家といっても百人百様なのは当然だとしても、恐らく100人中90人までは、愛とか悲しみ、又は美しい情景音楽だと答えるだろうと私は思う。そんなことを言っても、どれだけのものが書けるかは知れたものではないが、たいていの人はそれなりに美しい曲を書きたがるし、またその方が作曲もしやすいのだ。それに比べ、4番目のもろもろの心理描写というのは実に難しい。ほとんどメロディが目立ってはいけない世界だから、ある程度以上の作曲の技巧がなければなかなか書けないとはいえるだろう。

音楽自体、本来「疑惑的」であったり「コミック」だったりするということはあるにせよ。せいぜいそのようなものであることを暗示的に説明するだけである。だから疑惑の音楽と言ってもなんの公式があるわけでもない。じゃあ、どうすればいいのか...こんな音楽でいいんだろうか、わからないなあ、いいのかなあ...というような、なんとも心もとない感じでヒョロヒョロ付きまわっている感じとでもいおうか...（それでも実はしっかりとした曲でなければいけないのはいうまでもない）。

さてもう一度、ヘッドハンターのストーリーに戻るが、いろんな疑惑が高まって行き、頂点に達したところで、仕掛け人は意外や意外、奥さんだったことが判明する。そうなるドラマの性格は一転する。

妻が静かに狂っていった原因は、主人公のあまりにも激しい「仕事の鬼」ぶりであったのだ。それに交通事故で死んだ幼い子供に対する心の傷痕も大きく影響している。こういう展開になると、こんどは静かに狂って行った妻への激しい愛と後悔に重点が移り、下世話にいうと「泣き」の世界となるわけだ。当方、作曲者としても、散々疑惑ばかり書かされた反動で、うんと濃厚に泣いてみる気になり、腕の見せ場とばかり張り切ることになる。

「ヘッドハンター」は、たいへん入念に創られた作品だったが、今どきなかなかこういうドラマ創りばかりというわけにもいかない。

テレビ東京の「大江戸捜査網」が七年ぶりに復活した。この音楽というものが、いまのテレビ映画の標準的な創られ方なので説明しやすい。

「大江戸捜査網」はもともと日活テレビ部の製作で、もう二十年ほどまえの、旧日活最後の頃に最初のものでつくられた。当時は、大江戸アンタッチャブルというルビが振られていたものだった（そのころはやっていた、アンタッチャブルというギャングものアメリカテレビ映画の向こうを張るつもりだったらしい）。

日活での時代劇という破天荒な試みに、当時、いちばん時代劇向きではない作曲家として私が起用されたように聞いている。27歳くらいの時だった。そこで勢いこんで、バカラック風西部劇のような曲を書いたのが、いまでも流れているタイトルバック音楽だ。

そのころ、時代劇の音楽はある種のパターン化したものがあったが、私としては思い切ってそれを打破すべく、西部劇のタッチを持ち込んだのだ。結局、時代劇であろうと西部劇であろうとアクションものに変わりのあるわけもなく、実にスムーズに時代劇に溶け込んだように思う。

今でもパターン化した時代劇の音楽というものはちゃんと存在する。例えば「水戸黄門」などその典型と言えるだろう。

実はこの「大江戸捜査網」という番組は、途中で何度も立ち消え寸前になっている。実際に半年間、別の番組になったこともあったし、七年前には遂に臨終を迎えたと誰しもが思ったものだった。それが今の時代劇ブームの復活の機縁のなかで不死鳥のように蘇ったのだ。

この番組の音楽は、当時一般的になりつつあったライブラリー創りで始まった。

いわゆる「ためどり（溜め録り）」といわれる作業で、シーンごとに音楽をつくるのではなく、全くパターン化したライブラリーとしての発注を受ける。要求される発注メニューは次のようなものである。

愛のテーマ	1、美しく	2、悲しく	3、喜び
泣きのテーマ	数曲（別れ、死、他）		
情景、多数			

格闘のテーマ 1、激しく大勢で 2、数人 3、宿命の対決  
コミック多数  
テーマ (タイトルバック) アレンジ多数  
スリラー・サスペンス 数多く (忍者の忍び、謀略、疑惑、追跡、等々)  
ブリッジ なるべくたくさん (ブリッジとはあるシーンから次のシーンへの橋渡しという意味)  
コンマ・ピリオド たくさん (ブリッジとは違い、<以上おしまい、ジャンジャン>のたぐい)

さて実際にはどういうふう作曲していくのだろうか。  
やみくもに作曲するわけにもいかない、まずは全体に流れるトーンを決めなければいけないのだ。

タイトルバックは、バカラック風西部劇のタッチなので、いくら時代劇の泣きとはいえ、浪花節的にはなりたくない (このツッパリは後ほどみごとにしっぺ返しをくう)。多分にアンタッチャブルを意識するという方針もあったので自然、私の音楽も当時はやっていたアメリカテレビ映画風タッチを目指すことにした。どんなタッチの音楽にしようと、愛、泣き、情景を書くのは、別に難しくはない。

難しいけれども、うまくいったときにカッコいいのは、アクション場面である。前から注意して聞いていたアメリカテレビ映画のアクション音楽のほとんどは、ストラビンスキーをジャズ風にしたようなタッチだった。と、くちでいうのは易しい。

変な話だが、「春の祭典」や「火の鳥」(両方ともストラビンスキーの代表作)の分厚いスコアをかたわらに仕事を進めたものだった (断っておきますが、決して盗作するためではありませんよ。そんなへたなことは一切致しません)。私の一番不得意なのはコミックだ。もともと私の日常性が目一杯コミックなせいで、音楽まで回らないらしい。

さて実際には、どこのどの場面に使われるのか全くわからないまま、いろんな曲を書きためて、ある日集中的に、半年分くらいの量を録音するのである。なぜこういう方法をとるのか...

もとはといえば、毎回録音をする予算を省くという経済原則が優先しての結果なのだが、これはこれで合理的な方法と言えなくもない。そのうまく行った典型例は、当時はやっていた<スパイ大作戦>だった。

このドラマには、二つの音楽しかない。ご存じ 5/8 拍子のテーマ曲と、もう一つ、非常に歌いにくいメロディのサブテーマだ。

もちろんいつも同じ装いではなく、とっかえひっかえ、色んなアレンジで登場するのだが、基本的にこの2曲だけが柱となっているのだ。

「大江戸捜査網」をライブラリーでやるのなら、絶対にそういうパターン化した手法をとるべきだと私は思った。そしてそれはあるていど思惑どおりになった。「大江戸捜査網」のテーマ曲は、最後の立回り必ず登場するようになったのだ。そうなると、あの曲はもう「大江戸捜査網」の顔になってしまう。実はあのテーマ曲、何度も新しい曲にしようとしてすべて失脚した。何年かた



って、初めて新しい音楽に衣替えしたとたん、半年後に番組は終わりをつげた。七年前のことだった。

そして去年、また新たなテーマ曲を作曲したのだが、やはり評判はよくなかった。決して新曲が駄目だったというわけではないと思いたい。しかし作曲家本人にも無意識のうちに「大江戸捜査網」=「あの曲」という図式が出来上がっているほどだから、回りの人の思い込みは、もっと激しいものがあるだろう。「パブロフの犬」の条件付け、または、ひよこが始めて接した人間を親と思いこむ、いわゆる「すりこみ」現象がすっかり出来上がっていたのだ。

今回の新曲もあわれ2.3回で取り外され、また20年前の曲に戻った。私の作曲の力が落ちたわけではないと思う。音楽には音楽の位置があるのだ。「寅さん」の伯父さんの役者が死んでも替わりはきくが、「寅さん」の代役はきかない。そんなものではないかと思う。

(続く)

## 丸山圭三郎先生とソシユール

純正律音楽研究会 正会員  
弁護士 齋藤昌男

1. 故丸山圭三郎先生(1993年9月亡)は、筆者のフランス語の先生であった。5年程前に、岩波書店より、丸山圭三郎著作集(全5巻)が出版された。この著作集の内容は、ほぼソシユールに関するものであるが、世界第1級の研究だそうで、ソシユールの紹介は後にする事にして、まず丸山先生の事から話を進めたい。

丸山先生は、所謂フランス文学を専攻した人ではなく、フランス語学を専攻した人であるとの触れ込みであった。まず文法や発音の簡単な説明があった後、いきなり簡単な会話からかなり高度までのフランス語の会話を記した会話集(丸山先生自身が編集したもの)の暗唱(recitation)をさせられた。重要な文法はその都度説明し、2ヶ月くらいrecitationをやってからいきなり戯曲を読み出した。そして半年後には、どうにかフランス語が分かる様になっていた。丸山先生のフランス語学に基づいた教授方法には、驚くべきものであった。

2. イタリア語学院リンガビーバム

もう一つすごく上手な語学の教授法にお目にかかったことがある。1980年後半の事であるが、ローマのレオナルド・ダビンチ空港の近くへ野外オペラを見に行った事がある。夏の夜のオペラ公演は、完全に暗くなってからと言うことで、21時15分開始と言う事であった。終わったのは午前2時頃であったと思う。駅へ行っても人がいなかった。時刻表には出ていたと思ったが、電車はこない。ヒッチハイクをするしかないと考え、近くの高速度道路の出口まで行って、車を止めた。どうやら真夜中になると、電車がバスに変わるらしい。早朝の魚河岸へ行く人達が乗るバスが近くにあると言うことで、そこまでヒッチ

ハイクをして、バスに乗ってローマ市内に帰って来た。

次の年、またイタリアへオペラを見に行く事になったので、今度はイタリア語を習ってから行くことにした。リングビーバムと言うところへ習いに行った。ここの授業は、まことにユニークであった。毎回、違うイタリア人の先生が現れ、同じテキストをそれぞれの角度から教えてもらった。確かに、言葉は、北イタリアの人と南イタリアの人と微妙に違い、男女によっても違う。また文法の説明も微妙に違う。結局、3人のイタリア人から同じテキストを習ったが、実に楽しい、イタリア語教室であった。

### 3. ニコライ堂のロシア語学院

ついでに最悪の例を挙げておきたい。

ソ連邦が崩壊した直後、モスクワへ行く事になった。少しでもロシア語を習っておきたいと思い、大枚10万円を払って、ニコライ堂のなかにあるニコライ学院へ行った。ロシア人が出て来ると思ったら、上智大学を出て東大の大学院に行っていると言う女性教師が現れた。彼女は、二言目には自習していらっしやいと言う。「私にはそんな時間がないので、ここで教えてくれ」と何度も言った。そんな遣り取りで1学期は終わってしまった。

しかし、幸いな事にロシア語は綴りと発音には規則性がある。モスクワで間違っただけで反対の地下鉄に乗ってしまった。次の駅で降りたら、大きな駅で、反対の方へ行く地下鉄は、ホームの反対側にはなかった。どうにか、駅名を読みながら、乗り換えホームへ行った。多少は、ニコライ学院も、役に立った様であった。

### 4. 朝鮮語について

韓国語と言わず敢えて朝鮮語と言ったのは、言うまでもなく朝鮮民主主義人民共和国も朝鮮語を使っているからである。

ハングルを2回覚えたが、2回忘れた。何故だろうか。ハングルは、余りにも人工的であるからであろう。ハングルは15世紀中頃に当時の学者たちにより作られ、大変科学的な文字だと言う。

朝鮮は、中国、ベトナム、日本とともに漢字文化圏とされている。しかし、韓国には終戦後、全く漢字を習わなかった世代が存在する。北朝鮮では、1949年にハングル専用を決定したそうである。

韓国では、中学・高校の「漢文」の授業で、1800字の漢字（字体はいわゆる旧漢字）が教えられているそうである。すでに、両国ともハングルだけで生活できるようになってきている様である。

### 5. さて、ソシュールについての話へ移ろう。

(1) フェルディナン・ド・ソシュール（1857～1913）は、スイスの言語学者であり、ジュネーヴ生まれで、現代言語学の創始者と言われている。スイスでも屈指の学者の家系に生まれ、14歳で言語学の最初の論文を書いた。パリ大学で歴史言語学を教え（1881～1891）、ジュネーヴ大学でインド・ヨーロッパ言語学とサンスクリット語（1901～1913）、一般言語学（1907～1913）の教授となった。一冊も本を書かなかったが、彼の死後、学生のとった講義ノートをもとに編纂された「一般言語学講義」（1916）は、基本となるシステムとしての言語に焦点をあてたことで、後の

記号論や構造主義に大きな影響を与えたと言う。

(2) ソシュールは「言葉が意味を伝える」と言う誰にとっても疑いのない点を出発点として、話し手から聞き手へと意味が正しく伝わるというのは、どういう事なのか解明しようとした。この根本問題を解決するためにコトバの本質を明らかにしようとした。コトバの本質を解明するための手だてを欠いていた言語学に新しい道筋をつけた。前記の丸山圭三郎著作集は、どの論文を見ても、筆者には、とても歯が立たないが、他の解説書を読むと次の様なことである。

(3) ソシュールの理論の基本は、言葉は記号だと考えたところにある。フランス人は蝶も蛾も「パピヨン」という言葉で表す。フランス人にとっては、「蛾」（あるいは蝶）は存在しない。これは「蝶」という存在があるから、私達はそれに「蝶」という名前をつけているのではない事を意味する。この事は、物と言葉の結びつきに必然性がないことを意味する。物と言葉の結びつきに必然性がない事を言語の恣意性と呼んでいる。

この様な例は、他にも存在する。虹は日本人には7色である。ドイツ人は5色である。ウサギは、野生であろうと、飼いウサギであろうとウサギである。ところがイギリス人にとっては、ペットのウサギを rabbit と言い、野生のウサギを hare と言う。日本人にとっては、愛よりも恋の方が軽いと考えるようであるが、アメリカ人にとっては、無償の愛も恋愛も love である。

(4) そしてソシュールは、言葉をラングとパロールという2つの側面に分けて考察した。ラングとは、ある言語の規則や文法のことであり、パロールとは、個々の発言行為のことである。そして、ラングとパロールを合わせた言語の全体像をランゲージと呼んだ。

(5) ソシュールは文字や音声をシニフィアン、それからイメージされるものをシニフィエ、2つを合わせてシーニュ（記号）と呼んだ。言葉をこのように記号と考え直すことによって新しい世界が見えてきたのである。

(6) ソシュールは、構造主義に大きな影響を与えたと言う事なので、構造主義とは何か、簡単に説明しておきたい。

サルトル（1905～1980）は、人間は自由であり、自由に考え、自由に行動することが重要だと考えた。ところが、レヴィ＝ストロース（1908～）は、人間の思考や行動は、その人間が属する社会や文化の構造によって規定されると考えた。これを構造主義と呼び、彼はソシュールの言語学（物と言葉の結びつきには必然がないとする言語の恣意性）を人間社会に適用して、社会や文化という構造があってその中の差異が個人であるとした。文化人類学者のレヴィ＝ストロースは、例えば、ある2つの未開社会同士の間で行われる女性を交換する風習の裏には近親婚の禁止と言う人類共通の行動が見て取れると言う。

現象の意味をそれ自体からではなく、それと関係する社会や文化の構造から読み取ろうとする考え方を構造主義と言う（プレジデント社発行哲学用語図鑑参照）。

以上

（平成29年7月26日 脱稿）

## 玉木宏樹遺作小説 湾岸のマーラー

「港の空の色は空きチャンネルに合わせたTVの色だった」で始まるのは、5、6年前に一世を風靡したサイバーパンクSFの旗手、ギブソンの「ニューロマンサー」だ。

この小説には色々驚かされたが、その一つは始まりの舞台が未来のチバ・シティだということだった。猛烈に猥雑で頹廢し切ったテクノポリス・チバでは、人間の生きた臓器の密売まで行なわれているのだ。

ギブソンの奥さんは日本人だが、本人は東京にも来たことはないという。そりゃそうだろうと思ったものだった。少なくとも「ニューロマンサー」を読んだときは....。しかし今やギブソンの設定はあながち間違いではないことが分かってきた。いやひょっとしたらギブソンは未来の千葉をヴィジョンとしてみたのかも知れない。

いま千葉は、とくに千葉港の周辺は、テクノ・ビールスにとりつかれ急激に汚染されつつある。その汚染地帯のまっただなかを走るのが未来のテクノポリスの遊覧電車たる風貌の、生まれたばかりのJR・京葉線である。

その日は本当に気持ちのいい秋晴れだった。自由業の私としては、ポカッとまる一日があくということがある。

「小人閑居して不善をなす」という諺があって、下らん奴にヒマを与えるとロクなことを考えないという我が身に照らしても真髓をついた名言だ。さて何か不善をなさぬよう、こんないい日は戸外にでよう。

いまは廃刊となったサンリオSF文庫からケイト・ウィリアムスの「杜松の時」を選び、CDウォークマンにマーラーとブルックナーの両方とも第六番の交響曲を用意する。

さて、どこへ....。

これが実は大変だ。私は大の鉄道ファンなので、電車に乗っているかぎり、どこへいくにもうっとうしく思ったことはほとんどない。だからかえって始末が悪い。無目的に電車に乗るとなると、行きたいところが多すぎるのだ。

出発点は港区。とりあえずは六本木まで歩いて地下鉄の日比谷線に乗る。

八丁堀から京葉線に乗って見る気になった。

私は子供の時から電車の運転手になるのが夢だった。しかし音楽家になるように教育された私は、夢を果たせなかった恨みをいまでも親に対していただいている。

ハハハ....いいおとながいまだに親をうらむとは我ながら情けない話だ。六本木からの日比谷線はなんということのない普通の地下鉄だが、八丁堀で乗りかえる京葉線はできたばかりのピカピカの地下駅で、まだ4、5回しか来てい

ないがそのたびにワクワクドキドキする。私はどちらかというと小さな地方私鉄のファンなので、JR線は好きではないが、この線は格別だ。最新土木技術と最新車両、そして通る沿線が湾岸と来れば、これはもうテクノトピアの遊覧電車だ。

すぐ来た各停の電車に乗る。入ってきた車両は色分けも京浜東北色の古い電車で新しいレールを汚すような妙な気分になる。

八丁堀のつぎは「越中島」。地上にでると道の片側はずうっと商船大学だ。開通の日に降りてみたが大学は春休みとあって全く利用客の少ない駅だった。大学以外にはなにもないところだが、二三年後には大変貌をとげることだろう。

「越中島」をでてしばらくすると電車は地上へでた。小さな川をはさんで対岸には大きな貨物ヤードが広がっている。しかし線路はつながってはいない。つながっていれば、亀戸方面へむかう連絡線も運行できるのに、などと鉄道ファンの私は妄想するのである。よく考えれば、こんなところから亀戸へつないでもだれが利用するのだろうか。またもし将来つなぐつもりなら、JRのことだからその気になればすぐにできるだろう。余計な心配をすることはなさそうだ。

「ウッディランド」とかかって木の匂いをふんだんに振りまく「潮見」駅をすぎると電車は高い高架をのぼりつめ、大きく左へカーブして地下鉄との連絡駅「新木場」へむかう。このジェットコースターのような橋げたの下には首都高が走っている。車の流れをとめないでこの巨大な橋げたを渡すには大変苦労したそうだ。もし失敗していたら広島事故どころではなかっただろうと思うと壮観壮観とばかりも言っていられない。

さて電車は左へカーブして「新木場」へむかうが、一方、新木場からまっすぐに高速道路沿いに鉄道用の構造が品川方面に延びている。まだコンクリートだけで電車は走っていない。こういう構造物を鉄道技術者たちは「ドンガラ」と呼ぶそうだ。その道にはその道の妙な隠語があるもんだと感心させられる。京葉線は国鉄時代に「新木場」と「千葉みなと」の間が開通していらい、「ディズニーランド」へいく電車として脚光を浴びているが、私は「ディズニーランド」には何の興味もない。

その後、新木場の「夢の島公園」、葛西臨海公園の「まぐろの泳ぐ水族館」等ができて、すっかりレジャー電車としての地保を固めつつあるが、私の興味は少し違う。大きくいえば、これらすべてをひっくるめて、幕張メッセ、千葉港まで延びて行く大変貌をとげる東京湾が一望のもとに見渡せるということにあるのだ。

おおげさにいえば、21世紀テクノトピアのイリュージョンと実像が見えてくるというわけだ。

日野啓三というおじん作家は「夢の島」というだらしのない小説で、埋立地に視線を移すと東京の別の顔が見えてくるということをつとくと書き、その変貌を現実の皮膚感覚にしている若者との感性の隙間を描いて大得意になっているが、それは単に出不精のおっさんが出くわした陳腐なカルチャーショックにすぎない。

私は車と飛行機が大嫌いで、鉄道と船のファンだから、日の出桟橋からの晴海行とかお台場公園行の船にはよく乗るので、東京湾の変化の激しさとか、そ

の時流にのった商売人とか、冬のさ中からサーフィンする若者たちの姿を良く見ている。

いま東京は、どんどんと海の方へ進出している。山手線の内側の東京の中枢を消化器官とするとその貪欲な食欲を満たすのは東京湾なのだ。グロテスクな巨大怪獣「東京」は湾岸にその大口をあけてすべてを飲み込もうとしているのだ。

外国の艦船を迎え撃つために急造した人工要塞のお台場同士の間隔は驚くほど近かった。当時の日本の大砲の射程距離が短かったためだ。

ただ一つ開放されているお台場公園に寝転がってショスタコビッチの「死者の歌」を聴いたのはいつのことだっけ....。

私も昔は車に乗っていたことがあった。しかし都内で車に乗っていていい思いをしたことはほとんどない。回りに見えるのは人と車と信号ばかり。ただでさえイライラする性格の上に情緒不安定が加味され、このままでは大事故を起こすという危険を覚え、車をやめた。

たいていの人にはなぜあんなに混んでいても平気で車に乗れるのだろう。高速道路の十キロを越える渋滞は当たり前のようにだし、時々入ってくるラジオの交通ニュースの渋滞度はもう異常の域をとっくに越えてしまっている。それでもなお車を捨てない人たちの感覚はどうなっているのだろう。

ドアツードアというイリュージョン、荷物があるからという言いわけ、もしかしたら道がすいているかもしれないという幻想....、こんなものは車にしがみつ理由にはならない。うちが狭いからせめて車でも....と言うのもわざとらしい。私が考える本当の理由、それは移動する空間を人の指図を受けずに確保したいということだと思う。だから特別、自分だけの空間に金をかけて高級車というイメージで塗り固めたいというわけだ。

つまり想像力のない人たちは電車という空間を、いやいや乗らねばならぬ貧乏人用の拘束車と思っているわけだ。だから「道路」という誰のものでもない空間を一次的に占拠しながら移動することに異常なる解放感を覚えているのだと思う。その感激の代償には、十キロの渋滞くらい何でもないというわけだ。改めて電車に乗りだして気づいたことは、圧倒的に時間が自由になることである。本を読もうと考え事をしよう人間観察をしよう何をしてもいいのだ。ハンドルとアクセルとブレーキと信号に気を使う必要は全くない。そして反射的にパトカーを恐れなくてもすむようになる。

中でも私の一番好きなのは窓からのながめだ。大体地方の鉄道に乗れば分かるが、窓外の景色と言うものを道路とくらべれば圧倒的に歴史の流れが感じられる。そしていま乗っている京葉線では、未来空間の変貌の兆しがくっきりとみえてくるのだ。

それにしても、日頃、常に質素で地味で謙虚な人が豪華な外車に乗っていても別段おかしいと思わないということはどこか異常ではないだろうか。

車大好きな友人に言ったことがある。「強制的に空間を占拠して、大気を汚染して、時間を無駄にして、車のどこがいいんだ」

するとみごとに逆襲された。

「よく言うよ、鉄道なんて、植民地掠奪の帝国主義者の道具そのものじゃない

か」

うーん.....、話はもとへ戻して。

電車に乗ると、驚くほど時間は自由になるし、読書量も増え、そこそこ歩き回るようにもなる。すると、何かが見えてくる。文化の拠点をつなぐラインが鉄道一本の開通によってどれだけ変わるか、それは大変なものだ。

都営地下鉄新宿線が開通した当時、さる有名人が、神保町で古本を見て、人形町で食事して、東銀座で歌舞伎を見て多摩のうちへ帰るということが一本の沿線で出来るなんて夢にも思わなかった、遠いと思っていた文化が近くに引き寄せられたと書いていたが、そのとおりだ。

東京地下駅に乗り入れた武蔵野線の電車に乗れば南船橋のオートレース、地方競馬、船橋法典の中山競馬を始めとして、浦和の競馬場、府中の東京競馬場と、まるでギャンブル環状線を形成しているのだから面白い。

さて、目的無しに京葉線に乗り、新木場まで来たわけだが、この線に乗れば自然と目的の駅が見えてくる。それはディズニーランドでもなければ葛西臨海公園でもないし、ブッシュにまで知れわたった幕張メッセですらない。私の目指すのは「千葉みなと」という、一見何でもない駅なのだ。東京ベイシティ・エリアなどと脚光を浴びているのは浦安からせいぜい幕張メッセまでだろうが、どっこい、この湾岸開発のドン詰まりに人知れず、ものすごさを秘めているのが、千葉みなとなのだ。

ひらがなで「みなと」などと表記されていると大概の人は、遊覧船の舟つき場くらいにしか思わないのではなかろうか。確かに「千葉みなと」から「蘇我」へ向かう浜べには千葉の海上保安庁の船が留めてあったりするので港の規模を錯覚しそうだ。しかしこの恐ろしく謙虚な駅名にもかかわらず、千葉港の実態たるや、いまや荷物取り扱い量がついに神戸を抜きさって全国一位となっている。ゆめゆめお間違いなく.....横浜を抜いてではなく、神戸を抜いてである。横浜はとっくに港の機能を縮小しているようなのだ。

世界に脚光を浴びている幕張メッセに比べると「千葉みなと」の駅前の何と貧弱なこと。まるで何もない淋しい通りからは、ギブスンのサイバーパンクの匂いなど何もない。車もあまり通らない道を少し蘇我の方へ歩き、右折すると、風景は怪しさを帯びてくる。道路はひろい。もちろんこれから街作りをするところなのだが、なぜかすえ切ったような、古臭い、カビ臭いフンイキが充満しているように思える。建物はみんな新しいのだが.....。

大きな郵便局の向こうには五年くらい前に出来た千葉県立美術館がある。ぜいたくな敷地にそう背の高くない品のいい茶色の建物。いやみごとなものである。だが中にはいってみると何か居心地の悪い違和感を覚える。

まだ建って五年くらいのはずなのにこの美術館はもう五十年くらい前から建っているようなおじん臭い匂いがあるのだ。中に常設してある絵にしてもそうだ。絵自体は立派な油絵なのだが、こんな潮風のま近くに架けておいていいものなのだろうか。

表にでると向かいは妙にアール・デコボコした建物だ。これはさる結婚式場チェーンのものなのだが、なんともいえないこのバランスの悪さが未来のテクノポリスの居心地の悪さを象徴しているような気になってくるのだ。

美術館の裏側には千葉港一周の遊覧船の舟つき場がある。前に来たときは三時ころが最終で乗りそこなったので急ぎ足で着いてみると、またしても出たあとだった。

この乗り場の建物というのがまるで釣り客を乗せる船の溜まり場、もしくは荷物かつぎのおばさんたちを運ぶフェリーの乗り場のような猥雑さで、とても日本一の巨大な港を観光させるようなフニキは毛の先ほども感じられない。変に沈滞した待合室には、くたびれ切った労働者風の人達がいぎたなくたむろして何やら密談を交わしている。

チグハグで居心地の悪い感じというのは、この風景に集約されているのではないだろうか。つまり、テクノ化の波がつい目の前にまで及んでいるのにそれを全く意識しない人たち（三時前に遊覧船の終わってしまう船会社を含め）の集団がいるということなのだ。

いくらハイテクの施設を造ってもしよせん千葉だから....と言うわけでは決してない。多摩ニュータウンでもそうだった。開発直前の多摩の農家の庭先にぶら下がっていた色鮮やかな吊るし柿の写真はいまでも脳裏に焼きついている。コンピュータ・ビールズと同様にテクノ・ビールズというのがあるのではないだろうか。多摩ニュータウン時代のテクノ・ビールズはまだまだ繁殖力の弱いものだった。しかしいまのベイ・エリアに住み着いたテクノ・ビールズはそのうち猛威をふるうだろう。こんなウィークデーの遊覧船の待合室は一見いなかくさく、ひなびたように見えるが、ビールズは意識的にこの場所を避けているだけではないだろうか。

待合室を出る。目に襲いかかるものがある。秋晴れで雲ひとつない気持ちのよい青空にもものみごとに威圧的にそびえ立つのは、壁面すべてをガラスで被った長方形の千葉ポートタワーだ。

今日は一段と輝かしく太陽を反射し、クリスタルな壮観さを誇っている。しかしこれも外面だけだ。内部は驚くほどいなか臭い。

中に展示されている、埋立る前のこのあたりのパノラマ写真を見ると、浦安近辺にくらべ、いとも簡単にテクノ化の波に負けた様子がよく見える。

しかしうまく消化されないままのいなか臭さは、いささか怨念じみて内部空間にすくだまっている。だから、どのフロアに焼鳥屋やおでん屋が出てきても一向に不思議ではない。しかし、クリスタル要塞に巣食ったテクノ・ビールズは明らかにその繁殖のチャンスをうかがっているのだ。

公園に出る散歩道に出ると、パトカーがとまっていた。回りに人は全然いないからいやでも私の存在は目立つ。パトカーはだまって停車したままだったが、私が通りすぎてしばらくすると、ソロソロと動きだした。私を追い越すときにも何やら二人の警官は話し合っている様子だった。なにせ真昼間のことだ。向こうとしても職務質問するようなきっかけもないらしい。

私はタワーのふもとに広がる芝生の公園に大の字になり、ブルックナーの六番をウォークマンにセットした。タワーのクリスタル壁面の反射はギラギラとおぞましく、まるで子供のときに遊んだ太陽レンズのようだ。

サンリオSF文庫の何かの表紙にそっくりのタワーだなあ等と思いながら、ケイト・ウィリアムスの「杜松の時」のページを開く。



視界のはしをパトカーがよぎる。公園を一周してなおかつ、私の様子をうかがっているのかも知れない。

ブルックナーの6番は芒洋とした牧歌調の曲だ。牧歌調----ボッカチョ----スッペなどという言語障害地獄をもものとしめない堂々とした大がかりな牧歌調だ。しかし不本意なことに寝転がって見上げる空の青さにはブルックナーの音楽はマッチしない。一度ウォークマンで同じような体験をすれば分かることなのだが、彼の音楽はひたすら地上的な牧歌調であり、視点を地上の芝生の緑に移せばみごとに調和する。彼の音楽には恣意的な天国性などありえないのだ。ブルックナーの前ではクリスタルの要塞ですら自然現象のように見えてくるから不思議だ。

イギリスの評論家、コリン・ウィルソンはブルックナーの音楽のことを、ただ自然現象の感じを出させるのが精一杯で、夕立のように非個人的だと看破している。しかし夕立のような爽やかさも少し違うようだ。

村上春樹はラベルのボレロを聴きながら小便をすると延々と止まらないような気がする書いているが、ブルックナーの音楽を聴きながら野糞をするとあたり一面香りの園になってしまうだろう。

しかしブルックナーに罪があるわけではない。120年も前にウォークマンの出現など想像できるわけないし、青空に向かって演奏するなんて考えもつかなかっただろう。

ブルックナーの音楽をBGにして読みだしたケイト・ウィリアムスの「杜松の時」は実に変わったSFだ。アメリカ人にもかかわらず、深く沈潜するクライSFばかり書き、ほとんど売れていない。この小説もアメリカ・インディアンと共生する女流言語学者の話だ。宇宙人からのメッセージらしきものの真贋をめぐり、昔の仲間が砂漠の奥のインディアン部落まで彼女をたずねてくる。彼女は言語の裏にひそむ人間のアイデンティティをインディアンの霊的生活に託しているのだ。言葉の錬金術師は人類を救えるか.....。

あたりには人一人なく風も雲もない。まるでブルックナーの垂れ流す牧歌剤に回り帯がまみれてしまったようだ。一時間近くブルックナーを聴いたあとマーラーの六番に変えたるとたん陽がかげりだした。

いつのまにか私の意識は目の前のクリスタル・タワーの中に浸透していった。マーラーの大音響は、青空のような開放された空間では呪術性をもたないのだ。タワーの中は虚ろな空洞だった。

ティンパニとトロンボーンとコントラバスの地鳴りの様な吼声にあおられて私の意識はどんどんヴァイオリンの高音部、ピッコロの域へと高サイクル化していく。実は高所恐怖症なのに、マーラーにとりつかれた私は激しくのぼりつめて行く。彼の音楽はいくら伸び切っても次から次へとわき出る中音部のために密度が薄まることはない。ウィンドマシーンのすさまじい音にまできりもみにされ、私の意識はちょうどアインシュタインの宇宙モデルのようなねじれた円管状の姿になっていく。激しくスピードを増した、鋭いハイピッチのきりもみは、以前の高血圧の発作の悪寒の前触れのようなものを思いださせる。あまりにもハイになった私の意識は忍耐の限度を越え、自分ではもう制御できなくなった血流と脈動の粟立ちのなかで助けを呼ぼうとした瞬間、頭蓋骨全体を

エコールームにしたような、ハンマーの大音響の鉄槌が下る。  
耐えられない衝撃の第二波、第三波について私の意識は闇の底からの絶望の触手につかまれて、下へ下へと引きずり下ろされる。まるで穴のあいた落下傘のように私の意識は無重力となり下へ下へとまっさかさまに....

下へ下へと引っ張っていたのは小犬だった。ズボンのすそをくわえてじゃれていたのだ。

目覚めた私に気づくと犬もビクっとしたように体をかたくした。そして2メートルほど遠ざかり私の回りを歩きだした。

マーラーは六番の最終楽章で三回打ち鳴らすハンマーについて「芸術家はこうして倒れる」と、妻アルマに言ったという。

ブルックナーの膨張しきった牧歌調を粉々に粉碎するマーラーの大ハンマー。私はテクノポリスのクリスタル要塞に君臨するマーラーの大音響に未来の醜悪さと恣意性を見たような気がした瞬間、太陽は西に沈んでいったのだった。



## 今後のスケジュール

### 【癒しの純正律音楽コンサート】

2017年9月16日土曜日 16時開演

会場：山崎製パン 飯島藤十郎社主記念 LLC ホール

出演：水野佐知香(Vn.)、三宅美子(Hp.)、吉原佐知子(箏)

ゲスト出演：ベアンテ・ボーマン(チェロ)

入場料： 前売り 3,000 円 (当日券 3,500 円) 学生 2,000 円  
会員特別価格 2,000 円

### 【New year concert】

2018年1月27日土曜日 2回公演

昼の部：14時開演(50名様限定)

夜の部：18時開演(50名様限定)

会場：ラリール

出演：水野佐知香(Vn.)、三宅美子(Hp.)、吉原佐知子(箏)

入場料： 3,500 円  
(会員特別価格 3,000 円)



おたより募集！

会報のご感想、ご意見、純正律音楽にまつわること等々、なんでもお寄せ下さい。たくさんのお便りを、お待ちしております。

次号の【ひびきジャーナル】にてご紹介させて頂きたいと思っております。

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 NPO 法人 純正律音楽研究会

お電話：03-5317-0291 FAX：03-5317-0289

e-mail：puremusic0804@yahoo.co.jp

http://just-int.com/

平成 29 年 8 月 21 日 発行責任者： NPO 法人 純正律音楽研究会

編集： 相坂政夫